
夜に従う小鳥たち

桜華蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜に従う小鳥たち

【Nコード】

N7040A

【作者名】

桜華蒼

【あらすじ】

雨の日に阿笠邸の前に倒れていた八才を、哀は博士と同じように家に匿う。哀、博士そして八才との共同生活が始まって……。

プロローグ（前書き）

声ネタです（笑）。

シリアスな感じですが、哀vコにハオ（シャーマンキング）が絡んでさーどなるでしょう。的な話。

シャーマンが途中で終わってしまったので、ええい！ってなノリです。

ブローグ

哀は時々思い出す。

自分が拾われた雨の日を。

伸ばされた手が暖かったこと。

自分も、いつか誰かに差し出す手が暖かいといい。
そんなことを思いながら眠りについた翌日。

朝から降り続いていた雨の音で哀がいつもより早い時間に目を覚
ますと、家の門の前で誰かが倒れていた。

ソファに寝かせ、目を覚ました彼は自分を「ハオ」と名乗る。

「あい」と自分の名前を教えた哀にハオは寂しそうな瞳を向け「
哀しい名前だね」とふっと笑った。

「僕はそれを知らないから」

雨の日に始まる、哀とハオと博士の共同生活。

彼に迎えは来るのだろうか？

ブログ（後書き）

自分でも意味不明なものを書いてるな、と思いつつ、思いつきなネタですが、ハオが幸せになるラストになるように書いていきたいと思っています。

温かい目で応援よろしくです

一雨

と、と、と……。窓に当たる雨の音と、カーテンから差し込む薄い光に哀は瞳を開ける。

ベッドサイドに置かれた赤い目覚まし時計に手を伸ばす。午前5時20分。

このまま起きても……。とまどろみの中で哀は考える。ゆったりと流れる平和そのものの時間が、とてつもなく愛おしくて哀は一度目を閉じた。

一定のリズムを刻む雨の音が心地よくて、一瞬眠りの国へと意識が持って行かれそうになる。だけど。

哀はふと思いつき、勢いよくブランケットをまくった。カーテンを一気に開けて、伸びをする。

外は結構な雨降りで、今日は一日家で本でも読んで過ごそうかしら。

博士は学会だから今日は帰ってこないのよね、一人で朝食を食べるのは久しぶりだね。

断片的に考えを巡らしながら、リビングへ向かう哀。がらん、としたリビングに、電気を付けると一人きりじゃない気がして安心する。

こんなとき、どうしてか名探偵さんの声が聞きたくなる。あなたはどんな夢を見ているかしら？　なんてね。

哀は、そっと笑って外のポストから新聞を取ってこようと、玄関に行き、傘立てから緑色のビニール傘を出して、外に出る。

ポストに背伸びして、ビニールに包まった新聞を取り出して、それから哀が何気なく地面に目を遣ると、そこに人が倒れていた。

長い髪が地面に伸びて、その人物はマントらしきものを羽織り、ブーツを履いている。

身長から見ても同年代のようで、哀は眉を寄せた。
女の子？　行き倒れかしら？

哀は、門を開けて、一歩近付いた。
そして、傘を差しかけたまま、そつと地面に伸ばされた手首を握る。

よかった。脈はしっかりとってるわ。

屈みこんで、その顔を見た。

長いまつげ……。

ここにそのままつてのもね。

哀はため息を吐いて、その人物の肩を抱き上げ、よろめきながら阿笠邸へと戻っていった。

とりあえず、ソファに寝かせて、暖房を入れる。

「ア……」

その人は、何かを呟いていた。

誰かの名前なのかしら？

向かい合い、じつとその人物見つめる哀は、硬く瞑られた瞳が何色なのか、そんなことを考えながら、ゆっくりとまぶたが重くなつていくのを感じて、ソファに身を預ける。

ふと気がつくと、彼……なぜそう思ったか哀にも分からないけど、男は紫色の瞳で哀を見つめていた。

「気がついたの？」

哀が少し寝ぼけたような声で、問うと男は黙って頷いた。
警戒してる。

あのと私の私みたいに。

彼は耳から星の刻まれた丸いイヤリングを外してテーブルに置いた。

「葉は？　アンナは？　オパチヨ……。あれからどうなった？」
それが独り言かなんなのか哀には判別がつかない。

哀の思ったとおり男だった。

けれど「わからないわ」そう応えた。

「キミは誰だ？」

「あなたは、誰なの？」

「ハオ」

素っ気なく男は言った。哀に事情がわからないように、彼もまた何もわからないらしい。

「ここはどこだ？」

「東京都米花町」

「トーキョウ？　ここが？」

信じられないというように、彼は顔を伏せる。

長い髪から雫がポタポタ落ちて、それは涙みたいだとぼんやり哀は思った。

「名前……」

しばらくして、ハオはぽつりと零した。

「え？」

「キミの名前を聞いてない」

「あい」

はつきりと哀は告げた。

「哀しい名前だね」

ハオは顔を上げる。

哀が昔よく見せていた自嘲めいた笑みが浮かんでいた。

「僕はそれを知らないんだ」

一雨（後書き）

そんなこんなで連載開始

いつも燃焼が早いのが自慢です（笑）

燃え尽きないように頑張っていきたいと思っています。

次回予告：『二雨』

「ただいま哀くん、ん？ この子はお友達かの？」

「おかえりなさい。——あら、忘れちゃったの？ 最初からいたじやない」

「おお！ そうじゃった、そうじゃ……たか？」

二雨

「あなたが思ってる“あい”じゃないわ」

哀はやりわり否定した。

「あなたが言った哀しい方の“あい”よ」

「……どうして？」

「私も“あい”を知らなかったから」

ハ才はそうか、と呟いて哀を見つめる。

「キミはアンナに似てる」

そう言って、哀の髪に手を伸ばす。

「今の僕には闘う力は残されていないけど、たったひとつ。

——人の心が読める」

「妖怪みたいね。そういうの、知らない？」

驚く素振りも見せず哀は返した。髪に触れる手を払うこともせず
に。

「知ってる。『この人はどうしてあんなところにいたのかしら？』」

こう思ってるね、哀」

いきなり名前を呼ばれても（名前しか教えてなかったが）、哀は
別段不快とは感じなかった。

揺れる瞳が哀しげだから、もしかして憐憫の眼差しを向けてしま
っているの？ それって失礼だね。

「僕を助けてくれた人がいるんだ。オパチヨが、自分の力を使って、
この世界の扉をこじ開けた」

ハ才は最後に聞いた「ハ才様！」の叫びを思い出す。

後にも先にも、あんな哀しい声を聞いたのは初めてだった。

一人で、あの子は残されている。不安になって泣いていやしない
か。

「ハ才……？」

哀は黙りこくった彼に声を掛ける。

なんでこんなに気をかけるのか、哀にも全然わかりはしないけど彼女は彼から瞳を逸らせない。

「こっちに来たときの空間のねじれで年はこんなんだけど、向こうでは一応14歳かな？ 葉と一緒にだから」

「最初から説明してもらってもよいかしら？」

「全てを説明することは避けるけどね、そうしたら、キミはきっと僕をきらいになる」

一言も口を挟まず、ハオの話を聞き終えた哀は、彼が黙るとキツチンに立って紅茶を淹れた。

「どうぞ」

「僕はエスプレッソが好きなんだけど。葉とも飲んだ」
後半はほぼ独り言だろう。

「きつとこれも好きになるわ」

差し出したマグをハオは受け取り、恐る恐る唇をつけた。

「うん、葉っぱの味だね、おいしいよ」

一口のどに流し込んでハオは笑った。

初めて見る笑顔。

「……あなたのこれからだけ」

そう前置きして、自分も持ってきたマグで紅茶を飲むと哀は言う。

「よかったらここにいといるといいわ。幸い、部屋はいっぱいあるし。」

博士もあなたを追い出したりはしないと思う」

「ハカセ？ ああ、キミは一人でいるわけではないんだね」

「そうよ。一緒に暮らしているの。だからあなたもいていいの」

カシャン、とリビングの奥で鍵の開く音がした。

「随分早いね、今日はまだ帰ってこないかと思ったわ」

呟いて、哀は立ち上がり、重いポストンバッグを抱えた博士を出迎えた。

「おかえりなさい、博士」

「ただいま、哀くん！ 早起きじゃな、思ったより早く用事が終っ

ての。

哀くんと朝食を食べようと急いで帰ってきたんじゃよ」

満面の笑顔を浮かべる博士を、こそばゆそうに笑い哀はリビングの扉を開けた。

——ハオがいない。

開け放たれた窓。

カーテンがはためいた。

二雨（後書き）

突然失踪したハオ。

彼は一体どこに？

次回予告：『三雨』

「なあ、灰原」

「あら？ 工藤君どしたの？」

「また転校生がくるって本当か？ このクラスって多くないか？」

「さすが探偵さん、情報早いわね」

「ハオって、どこが苗字で名前なんだ？」

「……暑くて疲れているの？」

三雨

はたはたと揺らめくカーテン。

哀は瞬時にハオが出て行ったことを悟った。

「——ちよ、哀くん！ どこに行くんじゃ！ カサ！」

スリッパを履いたまま家を飛び出した哀に、博士は声をかける。

取り残された博士は、少しの間ぼうせんと立ち尽くしていたが、テーブルに置かれたマグを見てふうとため息を吐くと、朝食の準備でもしようかの。

そう考えてかばんを置き、エプロンを手にキッチンに立った。

開けられた窓から雨が打ち込む。

雨は激しさを増していた。

……どこ、どこに行ったの？

哀は雨にずぶぬれになりながら、息を吐く。

春先の冷たい風が、体を通り抜け、その寒さに身を震わせた。

さつき会った人をどうしてこんなに気にかけるか全くわからないけれど。

その気持ちに、瞳に見覚えがあるから。

どこか似ている私と彼。その哀しみの奥にあるものが掴めないとしても。

阿笠邸にきた当初、雨の日や夜、哀は度々家を抜け出していた。

公園や、堤防にいる自分を迎えに来たのは、ほっとした様に微笑む博士か、あきれ顔で「見つけたぜ」と零すコナンだった。その両方がいるときもある。

昼から続いた雨が止んで、空気を洗い流し、星が瞬く初夏の夜。「勝手に出て行ってんじゃねーよ」

公園のブランコを漕いでいた哀の頭上からパーカーがぱりと落ちてくる。

「それ着てろ。……ったく、んな薄い格好でほっつき回ってたら風邪ひくだろー。そしたら博士が心配するっての」

「帰るぞ」

言って、哀の手を取るコナン。

哀は動かず、首を振った。

はああ。と聞こえるように盛大なため息を吐いてコナンは哀の隣に座って、ブランコを揺らし始めた。

「だ・か・ら着ろってば」

頭に置かれたままのパーカーを手にとって、強引にジッパーを閉め着せられた哀はただ黙っている。

さつきから専らしゃべっているのはコナンだけだった。

「んなに心配かけて、博士の寿命が縮んだらどーするわけ？」

ようやく顔を上げた哀の潤んだ瞳に見上げられてコナンは思わずどきりとした。

「な、なんだよ」

「泣いてなんか、ないわ」

「そーかよ」

横目で見た哀の瞳に何も浮かんでなくて、心底ほっとしたコナンは軽く流して返す。

哀の肩が僅かに震えている。

手を伸ばそうかと一瞬考えて、自分の考えにコナンは苦笑した。

そして、立ち上がって哀を一旦抱き上げ、ジャングルジムの上に乗せると、くるりと背中を向ける。

「なによ」

相変わらずの素っ気ない返事にくつとコナンは笑う。

「ほーら、帰るぞ」

「あなたにおぶさって……？」

「灰原軽いしい。とつと乗った乗った。——ぐうお！ いきなり

体重かけんな！」

「いっていったのはあなたじゃない」

持たれかかる哀の手を首の前で組ませて、コナンはゆっくり歩き出す。

「今日はそーいや七夕だな」

「もうお願いなんて年じゃないわ」

「帰って寝たら、明美さんに会えるかもしれないぞ。会いたいんだろ？　ちようど空も晴れたし、願い事の一つ叶うさ。ま、俺はもう叶ったし」

「どんな？」

「灰原が見つかりますよーにつてさ」

「いつだって、見つけるのに？」

「——何度でも、何回でも、いなくなったら見つけるからさ。出て行く前に一報してくれ」

「それじゃ、意味ないじゃない」

哀の声は震えていた。

「灰原」

「見てみるよ、星がキレイだぜ」

顔を上げた哀はひと時瞳を閉じた。そして、瞳を開ける。

「……よく、見えない、わよ」

いた……。

米花中央公園の脇を抜けた八才の手首を哀は後ろからぎゅっと掴んだ。

「どこ行くのよ！　あなた熱あるでしょうー！」

強い声音に、八才は一瞬肩を震わせ、おずおずと振り返る。

「——哀？」

「僕はあそこにいちやいけないんだ」

独り言ともつかない声が八才の口元から零れる。

雨なのか、それとも涙なのか、絶え間なく瞳から雫が落ちていく。

額に張り付く前髪を払って哀は言った。

「……いなくなったら心配するわ。——それって居場所があるってことよ」

ハ才は、虚をつかれたように、哀を見つめ、それから顔を歪ませて笑った。

「帰りましょう」

三雨（後書き）

今日は七夕なんで、ちょっと強引に入れてみました（笑）。

次回はとうとう転校生ハ才編突入予定でーす。

では、素敵な七夕Dayをお過ごしくださいませ

次回予告：四雨

「初めまして、コナン。突然だけど、ライバル宣言させてもらっよ」

「はあ？ お前ダレだ？」

「この世界を統べる王」

「ハ才。それ違うから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7040a/>

夜に従う小鳥たち

2010年10月24日04時03分発行